

「貨幣」の重み

——交換を拒む女と交換される女——¹

高橋 愛*

The Worth of “Currency” :

Women in Melville’s *Pierre, or The Ambiguities* and Hawthorne’s *The Blithedale Romance*

TAKAHASHI Ai

abstract

In Herman Melville’s *Pierre* and Nathaniel Hawthorne’s *The Blithedale Romance*, there are female characters that can be regarded as what Eve K. Sedgwick calls “currency.” These women do not completely accept their assigned roles. They take advantage of their given roles and by so doing, destabilize a society where women are exchanged as “currency” to strengthen relationships between men.

In *Pierre* Lucy is expected to marry the heir to Saddle Meadows for establishing a bond between the families. This means that Lucy has power to name the authentic successor to Saddle Meadows. When she shows her will, she conducts this power and nominates him for heir and confuses those who attempt to use her as “currency.”

In *The Blithedale Romance*, Priscilla moves around and helps male characters get in touch with Zenobia. Unlike Lucy, Priscilla does not refuse her given role as a subjugated woman, and her obedience looks ideal for a male-dominated society. Observing her role as “Veiled Lady” and her relationship with Hollingsworth, however, her femininity is problematic.

Lucy destabilizes a male-dominated society by her defiance, and Priscilla undermines it by her femininity. Both of them have subversive power in a society which exploits women as “currency.”

Keywords : *Pierre, or The Ambiguities*, *The Blithedale Romance*, currency, the exchange of women, homosociality

1. はじめに

ハーマン・メルヴィルの第七作目の長編『ピエール』は、異国や海上を舞台に男だけの世界が主に描かれてきた他の作品と比較すると、陸上を舞台にしており主要な人物として女が登場するという点で異例である。従来の研究では、この作品に登場する女たちのうち、主人公ピエール・グレンディニングの婚約者ルーシー・タータンが注目されることはほとんどなかった²。しかしピエールのアイデンティティの問題に目を向ける場合、彼女は看過することのできない存在である。『ピエール』では、ピエールのアイデンティティと深く関わる事柄として家

キーワード：『ピエール』、『ブライズデイル・ロマンス』、貨幣、女の交換、ホモソーシャルティ

*平成11年度生 比較社会文化学専攻

督の相続をめぐる問題も浮上してくるが、この問題においてルーシーが重要な役割を果たしていると考えられるためである。

『ピエール』におけるルーシーの重要性は、彼女とグレンディング (Glendinning) という名前との関わりに現れている。彼女は、ピエールの母メアリーや、彼のいとこグレンのように³グレンディング家の血筋を示す名前をピエールと共有していないし、イザベルのように血縁関係の可能性を示すことでこの名前に対する権利を主張するわけでもない。しかしルーシーは、グレンディング家の後継者に嫁ぐことが期待されていることから、いずれ自らこの名前を名乗り、この名前の継承者を産むことになる人物だと言える。いわばルーシーには、「家」を永続化させるために家長から家長へと譲り渡される交換財としての役割が課せられているのである。また、彼女が婚姻によってグレンディングという姓を名乗るようになることは、性的に曖昧なピエールのアイデンティティにとっても深い意味をもつ⁴。彼は、彼女との結婚 (の可能性) によって名家の家督継承者としての自らの位置を、さらにはその地位によって保証される男としてのアイデンティティを社会に明示することができる。「家」と「家」のあいだでの女の交換を通して、ピエールは、イヴ・K・セジウィックが言うような家父長的世界へと参入していき、一応の社会的生存を果たすことができるのだと言える。家父長制を強化するための交換財、つまり「男同士の絆を揺るぎないものにするための、交換可能なおそらくは象徴的な財」(Sedgewick 25-26) という役割と、ピエールのアイデンティティに対する影響力を考慮すれば、法的には家督がグレンへと移譲されたのちに、唐突に物語に舞い戻るルーシーは考察に値する存在であろう。

『ピエール』におけるルーシーの重要性を考察するにあたり、ナサニエル・ホーソーンの『プライズデイル・ロマンス』にも注目したい。この作品は、作家同士の交流があった時期に執筆され出版も同年であることから、『ピエール』との影響関係が指摘されてきたうえ、交換財としての役割を担わされた女が登場するといった類似点が見られるためである⁵。この作品において交換財としての役割を課せられているのは、プリシラである。『ピエール』においてルーシーが「家」同士のつながりを強めるための財として交換されることを拒むようになったのとは対照的に、プリシラは自らに課せられた役割から逸脱することがないように見える。従順という点でプリシラは、ゼノビアが言うように、「男たちが何世紀も費やしてこしらえたような女」(BR 122)⁶であるのかもしれない。しかし、彼女に「ヴェールの婦人」というもう一つの顔があったことも踏まえれば、プリシラには「女らしい」とは断言しかねるところがあり、彼女が物語において果たす役割を「女性性」とされる性質から逆照射して再考してみる必要がある。

本論文では、ルーシーとプリシラに課せられた役割とその役割に対する彼女たちの態度を検証し、家父長的な社会に彼女たちが影響を及ぼす可能性、あるいはその不可能性について考察を加えていく。

2. 交換を拒む女ルーシー・タータンの抵抗にみる攪乱性

『ピエール』において、ルーシー・タータンはその天使性が強調され、人間としての実体が伴う存在として描かれることがほとんどない。彼女との結婚生活に思いを馳せた際のピエールの反応に如実に現れているように、物語の前半においてルーシーはピエールの愛の対象とされてはいるものの、彼らの関係にセクシュアリティの影はまったく見受けられない。彼は夫として彼女を抱擁することでその天使性を冒すことを恐れ、「ぼくは重たい大地のもので、彼女は空気のように軽やかな光のものだ。天に誓って言うが、結婚は神を蔑みする行為だ」(P 58)と、結婚生活での彼女との性交渉に遠慮を見せる。メアリーやイザベルやグレンとピエールとの関係が性的な親密さをたたえたものであったことを鑑みると、性的な要素が排除されたピエールとルーシーの関係は特異である。はたしてルーシーはピエールにとってどのような存在なのだろうか。

ルーシーはまず、少年期のピエールとグレンの同性愛的ともとれる親密な関係に変化をもたらす存在として登場する。彼女は、「真理のお手本」(P 216) と評された彼らの親密な結びつきを「準備段階に過ぎぬ少年の友愛」(P 217) へとおとしめ、女をめぐるエロティックなライバル関係へと変成させる働きをしている。また二人の交際に対して双方の母親が示す歓迎ぶりから⁷、ルーシーはピエールの妻となることを期待されてもいる。ピエールとグレンとの関係やグレンディング家とタータン家の結びつきという点から、彼女は、男同士の絆を心的にも制度的にも強化するために利用される存在、「それ自体では価値がなく、男の間で流通させてはじめて価値を持

つ貨幣」(Sedgwick, 52-53)としての役割を負わされているのである⁸。鞍の牧場^{カドレル・メドウズ}において彼女は「貨幣」としての役割を従順に引き受けていたが、ピエールからの婚約破棄が原因の昏睡から目覚めると、それ以前とはうってかわった態度を見せる。彼女はピエールに付き従うという自分の意志を示し、自らにあてがわれた「貨幣」としての役割を拒むようになる。従順であることをやめた覚醒後のルーシーの態度は、グレンディニング家の新たな当主として彼女に言い寄るグレンらの動揺からうかがえるように、女を「貨幣」として流通させることで同性間の結びつきを強化しようとする男たちにとっては脅威となると言えるだろう。

覚醒後のルーシーが見せる攪乱性について論じる前に、ピエールが姓としていただくグレンディニングという名前について考えたい⁹。というのも、ピエールとグレンの対立は家督、すなわちグレンディニングという姓を継承する正統性をめぐる対立でもあり、そのなかでルーシーがきわめて大きな影響力をもつためである。

語り手によると、グレンディニングという姓はアメリカにおいては「貴族的」と言われる由緒ある家系を表し、さらにピエールという名は、広大な地所を一族にもたらした将軍の名を引き継ぐものとされている。この語り手の説明に従えば、ピエール・グレンディニングという名前は、アメリカにおける名家の本家本元の地位を象徴するものということになる。またこの名前は、青年ピエールの社会的生存にとっても重要である。度が過ぎるほど親密な母メアリーとの関係や、少年期のグレンとの同性愛的とも言える関係に着目すると、ピエールのセクシュアリティは、一九世紀の中葉以降、資本主義の発展に伴って徐々に形成され始めた白人中産階級の性規範とは必ずしも合致しない¹⁰。とくに母との関係を通して、彼は男女の分化も性対象の境界も曖昧なセクシュアリティを構築しており、彼のセクシュアリティは近代社会の性言説では棄却され、存続は不可能なものである。しかし、社会的には棄却されるセクシュアリティを構築しているにもかかわらず、実際には鞍の牧場において彼は一応の社会的生存を果たしていた。これは、ピエール・グレンディニングという名前に負うところが大きいと言える。この名前により名家の後継という彼の社会的地位が保証され、その社会的地位によって彼の男としてのアイデンティティが確認されることになるためである。さらに、家督の正統な後継者とされる青年にはルーシーという妻も約束され、彼女の存在により彼の異性愛が社会に保証される。鞍の牧場の正統な後継者に譲り渡されることになっていたルーシーは、グレンディニング家の存続ばかりか、ピエール個人の社会的生存にも深く関わる存在なのである。

ルーシーは、メアリーの遺言により家督がグレンに移行したのを機に昏睡から目覚め、物語に再び姿を見せる。「けさ、私はそう誓ったの」(P 309)と始まる断定に満ちた手紙のなかで、「なにかしらのあなたの秘密が、私には、『見る人』として、疑わしくてならないの。『悲しみ』が...私をこんな『見る人』にしたのよ」(P 309)などと、彼女は「見(え)る(see)」という語を何度も用いて自らの覚醒を告げ、「尼のようないとこ」(P 310)としてピエールの求道に付き従うとも宣言する。ただし、彼女は自らの確信と決意を述べるばかりで、いかにして「見る人」としての確信を得るに至ったのかを明らかにしていない¹¹。またその言葉から判断するかぎり、ルーシーの意志は人知を越えるものに基づいており、依然として彼女は天上的な存在のままだと言える。しかしこのような点を差し引いても、法的に名家の後継者と認められたグレンではなく、廃嫡されたピエールに付き従って生きるという彼女の決意は、女を交換財として利用しようとする男たちの目には危険なものと映ることだろう。彼女の選択は、グレンが自分を妻にすることによってグレンディニング家の後継者の地位に名実ともに収まることを阻止し、たとえ法的な後ろ盾が得られなくてもピエールこそがグレンディニング家の正統な後継者だと宣言するものなのである。意志をもつ存在として物語に戻ったルーシーは、社会的地位を表す名前を引き継ぐ者の妻になるという暗黙の了解を逆手に取り、後継者の任命^{エネジエン}をおこなう主体的な行為者になろうとしている。また、交換財としての役割を拒む彼女の姿勢が示す攪乱性は、グレンと彼女の兄フレッドの反応からもうかがえる。彼らはピエールからルーシーを奪還せんと躍起になるが、それは「貨幣」としての女が、彼らの同盟に代表されるホモソーシャルな男同士の結束にとって不可欠なものだからである。「貨幣」としての女を失えば、彼らはホモソーシャルな結びつきの影に隠れている同性愛的な欲望と対峙せざるを得なくなってしまう。セジウィックの言う「ホモソーシャル・パニック」を回避しようと、グレンとフレッドはルーシーを取り戻そうと必死になり、ピエールとの対立は激化の一途をたどる。男たちの絆を危機に陥れる可能性があるという点で、ルーシーは男たちが支配する社会にとって脅威となりうるのである。

しかし、ルーシーはピエールの破滅に呼応して命を落とすため、彼女が男たちに示した攪乱性が現実のものに

なることはない。ヘテロセクシズムが形成され始めた時期に企てられた真っ向からの反乱であるためにこのような描写で終わっているが、ルーシーの態度は、「貨幣」としての女を交換することで成立してきたホモソーシャルな男の社会が、自分たちの絆の強化のために利用してきた女によって転覆される可能性があることを示唆している。

3. 交換される女—プリシラの従順さがもつ転覆力—

『ブライズデイル・ロマンス』のプリシラは、実体が伴わない存在とされる点でも、従順とされる点でも、覚醒前のルーシーとの類似点があるように思われる。しかしプリシラを、鞍の牧場におけるルーシーと同じように男同士のホモソーシャルな絆を強化するための交換財と見なすことには、異論が出るかもしれない。というのも、「ぼんやりとしたもやのような不確かさ (uncertainty) がなおもプリシラの周りに溢れていた」(BR 49) あるいは「彼女には人間としての実体が欠けていた」(BR 185) と語られているように、プリシラの実体の無さは血肉の無さや不確か性という欠如の概念と関連づけられ、天上性と結びつけられるルーシーのものとは性質が異なっているためである。またムーディ／フォントロイの物語を踏まえると、「家」という制度の外部にいるプリシラは、ルーシーのように「家」の永続化のために交換される存在とは言いがたい。そもそもこの物語には、プリシラの他にも「貨幣」となりうる女がもう一人いる。彼女の異母姉ゼノビアである。まず「貨幣」となる可能性を持ちながらその役割をすり抜けているかに見えるゼノビアに注目し、プリシラに期待されている役割について考察する。

プリシラは、ムーディ、ウェスタヴェルト、ホリングスワスといった男たちのあいだを転々とするが、彼女の移動には絶えずゼノビアの影がちらついている。ムーディにはフォントロイとしてのかつての栄耀を照らす娘として、ウェスタヴェルトには彼が演ずる見世物の触媒となる女 (プリシラ) の後見人として、そしてホリングスワスには犯罪者更正施設建設計画への協力者候補として、彼らはプリシラを通してゼノビアを見ている。いわばプリシラは、男たちがゼノビアに接触する仲立ちをしているのだと言える。

それでは、なぜゼノビアはほとんどの男の登場人物と接点をもち、「女性的」魅力も有しているにもかかわらず、「貨幣」となり得ないのだろうか。また、同性である男との取引であるかのように、男たちがゼノビアに接近するにあたり「貨幣」としてプリシラを必要とするのはなぜなのだろうか。これらの疑問について考察を加えるために、この二人の女のあいだにある差異、すなわち、ゼノビアにあってプリシラにはないと言われる性的な経験と資産に着目してみよう。

第一の疑問を解く鍵となるのは性的経験の有無であるが、これはまずゼノビアの容姿に特徴的に現れている。温室で育てられた花を一輪だけ挿した彼女の豊かな黒髪は、成熟した「女」という印象を彼女に与えている。黒髪はセクシュアリティを体現するダーク・レディの象徴とされるが、彼女もまたこの文学的慣習に沿うように性的魅力をたたえた存在だとされる¹²。さらに彼女の性的経験を暗示するのは、彼女がかつて結婚していたという噂である¹³。「処女」は純然たる交換価値とされるが、いったん「処女」を失うと女は使用価値の地位に追いやられるとするリュス・イリガライの議論 (Irigaray 185-186) を援用すれば、男たちが交換財として利用できるのは性的経験がある「女」ゼノビアではなく、性的経験のない「少女」プリシラということになる¹⁴。

ゼノビアは「処女」でないために交換財としての利用価値をもたないが、かといってイリガライが言うように、母となって次代再生産の担い手として家父長制に取りこまれるわけでもない。「処女」でも「母」でもないゼノビアは家父長制から外れた存在だと言えるが、そのような彼女の位置を保障するのは彼女が所有している富である。資産をもつゼノビアは、家庭という女の領域に留め置かれて父や夫に養われる必要はなく、社会に出ても、労働者階級の女のように「転落」の可能性があると思なされることもない。自分で動かすことのできる資産をもっているという点で、彼女は近代社会における「女」という枠組みに縛られない存在なのである¹⁵。男たちは、家父長制に回収されない存在であるゼノビアを便宜的に男と見なし、彼女が所有する資産にアクセスするために、交換財として利用可能なプリシラを必要としたのだろう¹⁶。

プリシラは「暗い出来事の流れて漂う一枚の葉っぱ」(BR 168) にたとえられ、「自分の意志なんでもったことはないわ」(BR 171) と自ら語っているように、自分に課せられた役割に抗うことがない。「本物の女の神話」で

女らしさの特性の一つに数え上げられていた従順さが顕著に見られるプリシラは、近代社会の枠組みにとって、危険な女というよりもむしろ理想的な女だと言えるかもしれない¹⁷。従順であり続けるという点で、『ピエール』においてルーシーが示したような攪乱性が彼女にはないように見える。しかし、プライズデイルの共同体の失敗からさほど深い傷を負った様子もなく生き続けているかに見える彼女の命運をたどってみると、彼女を規範的な女だと言い切ることはできないのではないだろうか。

プリシラの規範性を再考するにあたりまず注目したいのは、「ヴェールの婦人」という彼女のもう一つの顔である。「ヴェールの婦人」とは、一九世紀にアメリカで流行した疑似科学を反映した見せ物である。この見せ物に関して、ニナ・ベイムのように当時の性のパラダイムが投影されているとする研究もあれば、成田雅彦のように、同時期に多くのアメリカ人の心をとらえた心靈主義の反映を見る研究もある。近代社会の性のパラダイムと心靈主義は交差することがないように見えるが、実はそうとはかぎらない。心靈主義はフーリエの社会観の影響を受けており、社会改革者も多く傾倒していたという。このような社会改革者は自らの思想を実践すべく共同体を組織したが、こうした共同体運動は中産階級の家庭制度の解体を目論むものでもあった¹⁸。つまり、一九世紀に人気を博した「科学」ショーには、覇権的な性規範に対抗しようとする動きと結びつく可能性があったと考えられる。「ヴェールの婦人」に関する分析から、この見せ物を演じ（させられ）たプリシラは、中産階級のイデオロギーを映し出すと同時に、そのイデオロギーの解体を目指した思想と通じる存在でもあるのだ。

プリシラの規範からのずれは、ヴェールがない状態にもうかがえる。彼女の規範からの逸脱ぶりが現れているのは、従順さとともに彼女を理想的な女に見せていたもの、すなわち「心 (heart)」である。心は、実体がないとされる彼女が唯一もっていた人間らしさである。彼女に占める心の大きさは、「この哀れな子どもにも心というものはあった。優しい母親の性格を受け継いだ彼女のなかには、深く静かに湛えられた情愛があった」(BR 186)と語られている。この情愛のおかげで彼女はうち捨てられた境遇を生きながらえることができたこととされ、プライズデイルでの生活でも彼女の支えになっている。肥大化した彼女の情愛は、まず異母姉への思慕として現れている。ゼノビアのもとに崩れ落ちるようにしてひざまずいてからというもの、プリシラはこの女に付き従う。さらにプリシラの心はホリングスワスにも開かれ、彼への情愛を支えにして、彼女は姉との死別という苦境を生き延びていく。姉の死に接したプリシラの姿を、「彼女のような単純な性質の人間の心は、当面支配しているただひとつの感情を受け入れるだけで精一杯なのだ」(BR 241)とカヴァデイルは語っているが、彼女の心は彼が観察するよりもはるかに問題含みのものである。

ドメスティック・イデオロギーでは心的なものが女の属性として特化され、心によって女は私的領域に留め置かれてきた。この点から見れば、従順で深い情愛を心に湛えるプリシラは、社会にとって理想的な女のように見える。しかし彼女の心は周囲の人間を癒すものではなく、彼女が過酷な境遇を生きぬくための拠り所ではない。彼女はその情愛で愛の対象を慰撫するのではなく、対象に取りつき寄生しているのである。プリシラに潜む危険性は、ゼノビアとウェスタヴェルトとの会談でほめかされ (BR 104)、最終的にはゼノビアも「あなたは私にとって悪運だったわ。害を与えるだけの力や意志は強くない赤ん坊ではあったけれど」(BR 220)と認めている。またプリシラの心の影響力の大きさは、彼女とホリングスワスの関係性の変化にも現れている。ゼノビアから非難を受け、プリシラを伴ってその場から立ち去ろうとするホリングスワスについて、「それは、己に対する自信が揺らぎ、遂に愛情に寄りかかろうとした男の敗北感にふるえる声だった。そうだ—強者も身を屈めて、この哀れなプリシラに寄りかかったのだ」(BR 219)とカヴァデイルは述べているが、庇護を与えてきたはずのプリシラからの庇護を受けずにはいられないというホリングスワスの逆転した状況は、彼が「たった一人の殺人者」(BR 243)にかかりきりになる以前から既に現れているのである。自信を喪失したホリングスワスと彼を保護者然として支えるプリシラという関係は、私的領域に囲い込まれてきた女が男に対してもつ影響力、いわば、女という他者なしに男は存立し得ないという女への男の依存を戯画化するものだと言える。プリシラは、慣習的とされる女でも社会を内部から転覆させる可能性があることを示している。

4. 貨幣の重み

自らの意志をもつようになるルーシーも、自らの意志を示すことがほとんどないプリシラも、男たちのあいだ

で交換されて初めて価値をもつ「貨幣」という位置にとどまらない存在になっている。覚醒後のルーシーは「貨幣」としての役割を拒み、自らの意志で居場所を定めようとした。このような彼女の意志に触れた男たちは、「家」の後継者としての社会的地位の確保をめぐる、あるいは自分達の連帯の内に隠蔽してある同性愛的な欲望と対峙せざるを得なくなることにより、アイデンティティが動揺する危険性を感じ、それを避けるために男同士の対立を激化させた。ルーシーが自らに期待される役割に示した拒絶の姿勢は、男に割りふられた役割を女が逆に利用し、男が支配する社会の価値体系に対して転覆的な威力をもちうることを示している。また、プリシラは社会的には女らしいと称揚される従順な態度を通しながら、男に保護される立場から男を保護する立場へと移行し、女に対する男の依存を戯画的に表している。

ルーシーもプリシラも、女を「貨幣」として利用する近代のホモソーシャルな社会に対して転覆力をもつにもかかわらず、彼女たちがたどる運命には大きな隔りがある。『ピエール』においてプロテーティナス・プリンリモンは、ルーシーの行く末を見越しているかのように、そのパンフレットのなかで次のように語っている。

一つ、地上の（時差修正時計的）営みでは、人間は天国的（標準時間的）理念によって規制されてはならぬということ。一つ、人間は日常の一般幸福を追究しようとのただの本能に駆られ、ある種の小さな自己放棄をも辞さぬことありとはいうけれど、だからといって、他の命、他の名分、または他の思想のため、完全かつ無条件の自己犠牲をしようなどと夢にも思ってはならぬ。（P 214）

日常の幸福を求めて地上の時間に合わせてしたたかに生きのびていくプリシラに対し、ピエールとの不滅の愛を信じて彼の理念に付き従ったルーシーは、天国的な理念を地上の営みにもちこもうとしたのだと言える。プリンリモンによれば、そのような行為は、「神の天上的智慧が人間にとっては地上的愚かさとなる」（P 212）もので、必然的に災禍と死を招く愚行である。それゆえルーシーが命を落とし、この摂理に従ったプリシラが生きながらえることになったのだろう。しかし、彼女たちが女をモノとしかみなさない社会に対して転覆的な力をもつこと、彼女たちが社会のなかでの女の有り様を考えるうえで重要な存在であることに変わりはないのである。

註

- 1 本論文は、日本ナサニエル・ホーソーン協会第二四回全国大会（2005年5月20日、於昭和女子大学）における発表原稿に加筆訂正を施したものである。
- 2 ルーシーに注目する稀少な研究のうち、物語冒頭のラブシーンに注目したブラスウェルは、婚約破棄以前のルーシーの描写にはメルヴィルの深いアイロニーが現れていると論じ（Braswell）、デイリングムは、毒や自己破壊と結びつけられるイザベルに対し、覚醒後のルーシーは懊悩するピエールの心に平穏をもたらす存在であるとしてルーシーを積極的に評価している（Dillingham）。
- 3 グレン（Glen）の本名はグレンディニング・スタンリー（Glendinning Stanly）で、グレンディニング家の血筋を示す名前をファーストネームとしている。
- 4 ミュラーはピエールに両性の特質が入り交じっていることを指摘したうえ（Mueller 14）、ナルシズムの点から青年ピエールについて分析している。またピエールの性的な曖昧さは、母メアリーとの関係もおおいに影響していると考えられる。母との原初的な関係で構築されるピエールのセクシュアリティの曖昧さについては、拙論（Takahashi, 2004）を参照。
- 5 作品中の男同士の関係に影響を及ぼしたとされる作家同士の関係、とりわけメルヴィルのホーソーンに対する熱烈な「友情」は、ミラーやプロドヘッドらにより指摘されている。なお、『ピエール』はホーソーンの『緋文字（*The Scarlet Letter*）』（1850）や『七破風の家（*The House of Seven Gables*）』（1851）の影響が見られることも指摘されてきたが、ルーシーとプリシラが「金髪で、長く苦しみ、自己犠牲的な」（Miller 240）フェア・レディとして登場するという点以外に、物語内で血縁によらない寄り合い所帯が形成されるという類似点があることから、本論文では『ピエール』と『ブライズデイル・ロマンス』との比較をおこなう。
- 6 テキストの引用は、『ピエール』からは書名をPと略したうえで括弧内に頁数を示し、『ブライズデイル・ロマンス』も同様にBRと略して括弧内に頁数を示す。
- 7 仲人として名を馳せるタータン夫人については、「ピエール・グレンディニングは、ルーシー・タータンのために見事選ばれた者なのであった」（P 27）と述べられ、他方グレンディニング夫人は「よく分かっているだろうけれど、お前が初めて私に打ち明けた時から—いいえ、それよりも前から—その瞬間から、私は勘でお前がルーシーのことを愛していると気づいていたし、いつだってそれを認めてあげてきたじゃないの」（P 56）と述べていることから、彼女たちの歓迎ぶりがうかがえる。

- 8 ミュラーはピエールとグレンの関係から、いわば心的な側面から、ルーシーをイリガライが言う「商品 (commodity)」だと論じている (Mueller, 70)。しかし『ピエール』が家の継承をめぐる物語でもあることを踏まえれば、「貨幣」としてのルーシーには男同士の絆を制度的に強化するのを助ける役割も課せられていると言える。
- 9 グレンディングという名前がピエールとグレンの関係に及ぼす影響と彼らの関係においてルーシーが果たす役割の分析は、拙論 (高橋, 2005) でも試みている。
- 10 一九世紀におけるアメリカ白人中産階級の性規範については、D'Emilio and Freedman, Faderman, Smith-Rosenberg、竹村を参照。
- 11 ワイ＝チャー・ディーモックが指摘するように、ルーシーは自らの確信の根拠や動機を明らかにしないことによってピエールの関心を勝ち得たのかもしれないが、彼女の手紙に見られる不明瞭性は『ピエール』の構造上の問題点だと言え、覚醒後の彼女の行動を貫く意志に対しては留保をつける必要があるだろう。
- 12 カヴァデイルの目を閉じさせるほどの艶めかしさを彼女の肉体が放っているということ (BR 44) はもちろん、彼女が「激情」と結びつけられている点からも、ゼノビアが性的な磁力をもつ存在だと言える。
- 13 フェダマンらが論じたように、一九世紀のアメリカ白人中産階級の社会では、「眠った」状態にある女のセクシュアリティは夫の手引きで「開発」されるものと考えられていた。このような近代社会の通念により、ゼノビアが結婚していたということを彼女の性的経験に結びつけることができるだろう。
- 14 『ブライズデイル・ロマンス』の語りにおいて、性的魅力をたたえた「女」とされるゼノビアに対し、プリシラは繰り返し「少女 (girl)」と言及されている (BR 26, 27, 29, 50, 72, 74, 190)。
- 15 男女の境界を厳格に定めると同時に女を階級でさらに分断した近代社会の性言説からゼノビアが踏み出していることは、彼女が規範からの逸脱行為をおこなっても批判されずに容認されてきたとされる点 (BR 189-90) にもうかがえる。
- 16 「貨幣」としてのプリシラの役割は、終章で加えられたカヴァデイルの告白によって裏づけられる。プリシラに対する愛を暴露することで、彼女をめぐる彼とホリングスワスのエロティックなライバル関係が提示され、プリシラが彼らの同性愛的な欲望を隠蔽する役割を負わされていることが明らかになる。
- 17 バーバラ・ウェルターは、女の従順性について「従順さはおそらく女に期待されていた最も女性的な美德であった」(Welter 27) と述べている。
- 18 一九世紀のアメリカにおける共同体運動については、高尾を参照。

引用文献

- Baym, Nina. "The Blithedale Romance: A Radical Reading." *The Blithedale Romance: An Authoritative Text Backgrounds and Sources, Criticism*. Ed. Seymour Gross and Rosalie Murphy. New York: W. W. Norton & Company, Inc., 1978: 351-368.
- Braswell, William. "The Early Love Scenes in Melville's *Pierre*." *Critical Essays on Herman Melville's Pierre, or the Ambiguities*. Ed. Brian Higgins and Hershel Parker. Boston: G. K. Hall & Co., 1983: 210-216.
- Brodhead, Richard H. *Hawthorne, Melville, and the Novel*. Chicago: The U of Chicago P, 1976.
- D'Emilio, John and Estelle B. Freedman. *Intimate Matters: A History of Sexuality in America*. 2nd.ed. Chicago: The U of Chicago P, 1997.
- Dillingham, William B. *Melville's Later Novels*. Athens and London: The U of Georgia P, 1986.
- Dimock, Wai-Chee. "Pierre: Domestic Confidence Game and the Drama of Knowledge." *Studies in the Novel*. 16.4 (1984):396-409.
- Faderman, Lillian. *Surpassing the Love of Men: Romantic Friendship and Love between Women from the Renaissance to the Present*. London: The Women's Press, 1985.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Blithedale Romance*. 1852. New York: Penguin Books, 1986.
- Irigaray, Luce. *This Sex Which Is Not One*. Trans. Catharine Porter with Carolyn Burke. Ithaca: Cornell UP, 1985.
- Melville, Herman. *Pierre, or the Ambiguities*. 1852. Ed. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Parker. Evanston: Northwestern UP, 1995.
- Miller, Edwin Haviland. *Melville*. New York: G. Braziller, 1975.
- Mueller, Monika. "This Infinite Fraternity of Feeling": Gender, Genre, and Homoerotic Crisis in Hawthorne's *The Blithedale Romance* and Melville's *Pierre*. London: Associated UP, 1996.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia UP, 1985. イヴ・K・セジウィック『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』、上原早苗、亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、2001年。
- Smith-Rosenberg, Carroll. "The Female World of Love and Ritual: Relations Between Women in Nineteenth-Century America." *Disorderly Conduct: Visions of Gender in Victorian America*. New York: Oxford UP, 1985: 53-76.

高橋 「貨幣」の重み

Takahashi, Ai. "Neither a Son nor a Daughter: Ambiguities of Sexuality in Herman Melville's *Pierre, or the Ambiguities*." 『人間文化研究年報』27号、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科、2004：77-83.

Welter, Barbara. *Dimity Conviction: the American Woman in the Nineteenth Century*. Athens: Ohio UP, 1976.

高尾直知 「家庭崩壊の美学—ホーソーンと宗教共同体的家庭改革—」『ホーソーンの軌跡—生誕200周年記念論集—』川窪啓資編、開文社出版、2005年：97-118.

竹村和子 「[ヘテロ] セクシズムの系譜—近代社会とセクシュアリティ」『愛について—アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店、2002年：33-88.

高橋愛 「名は体を表すか？—ハーマン・メルヴィルの『ピエール』における名前とセクシュアリティ—」『F-GENS ジャーナル』4号、お茶の水女子大学21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア (F-GENS)」、2005年：113-119.

成田雅彦 「ホーソーンと心霊主義—『プライズデイル・ロマンス』をめぐって」『ホーソーンの軌跡』：77-95.

(2007年12月1日受理)